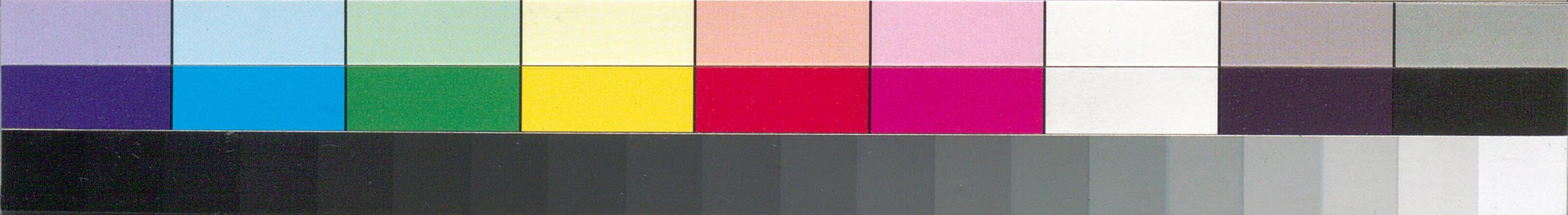


最高至上なる 併教と一世と風靡一十方と震
蕩をるはとの実効実カがそくてをりらぬ筈
不有る
無るは顧みる實際と見れば日本支那印度(子
ポール国セイロン島)の併教を概して之と言
ふと一の偶像教とあり過ぎぬ有様不有る又英
獨佛などの諸国をも随分熱心なり。併教研究
者の續々輩出してサンズクリット語パリ語
なりと研究して印度に遣つて居る所の併教
経論の原書なりと研究して居るものも
少ららぬやうに有る可一人も併教の真精神
真樞軸と全見しとありぬと云ふの事
不可思議の現象不有る
第三章 其無る所以と研究して見ると印度
の哲学や宗教やりの原理を叙述するの
皆詩的印明的不有るなり其真相実義を把握
し看破するたとの出来ぬの不有ると考へら
る、
詩的と言ふのを印度の哲学や宗教やりの
原理を叙述するたを一般の風習として比喩小

東條 貞孝



ふく如き佛教の眞^理價値要素と発見し、
のちをけきを世界の人類に向く明らるゝ之
を説明して人々自己の認識力了解力思想力
判断力と以てなす程至當の道理を有ると信
用せしめやうとせむのもそのこと言ふのも
實に不可思議なる現象を有る

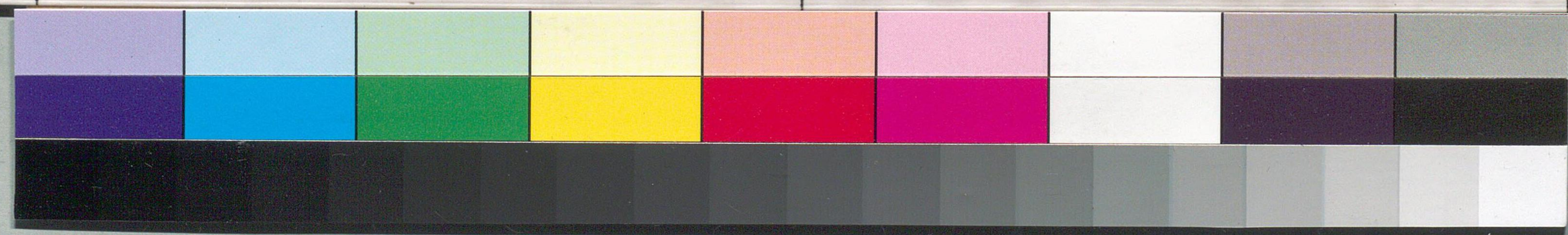
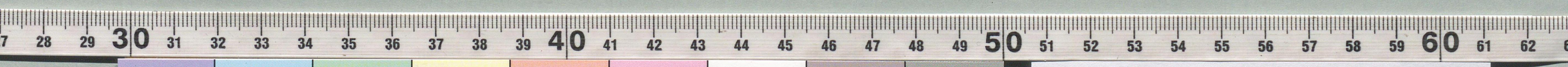
説的なる雄大壯麗なる。叙事詩の中其原理
 とを合せしめしものなる華嚴経法華経撰
 佛傳維摩經等と皆其れを有する夫の有名なる
 薄伽梵即ちガガバドギクスの如きもパニヤ
 一の戰場でクル族の勇士アルジュナと對して
 ヴシラの化現キリシナ法と從く於信の中
 二數論と瑜伽論とヴェガンタの三派哲学を洞
 和せんしと一のりので有する華嚴経のめを實
 二深遠高妙なる哲学の原理を表ししもの
 三有るけをもも哲学の原理として説く居
 三所を以て皆釈迦牟尼佛陀の不可思議なる
 神通妙用として説く居る
 志のし是を印度ものりをもせん希臘をも
 始る其れを有する夫のエレヤ哲学の完成者
 パルマタのリスの哲学をもも三篇の叙事詩
 四ら成り立て居る第一篇を馬二騎と全智の
 女神の處に行くものと叙述し第二篇第三篇
 五三と女神の教る所として第二篇を本覚道
 即ち純有無差別論を述へ第三篇を倒見道即
 ちヒクゴラスの宇宙論を述へしものなる

東林原表



明瞭洞徹なり、議論も少く、その其結論も、
く皆問違て居る、其れを何う言ふか、
ふ、其結論を一切理義を断せん、佛の聖権即ちオウリ
リテ、一は依頼れると言ふ、一幸て有る
一体印度の五明の中の因明即ち論理学の要
素と古代の現量比量聖教量の三量を取つ
し、そので現量と言ふのも直覺的カ悟依比量と
言ふのも思想力聖教量と言ふのも四吠陀聖
典を始として佛教なりと佛經教論なりと數
論經カニキリ、ニタラ勝論なりと勝論經

東林堂



又プラトリーの全集なども叙事詩でもせん
の大抱其師ソクラテスと友人との談話の体
に脚色し^しる^{もの}有る希臘でもアリストテレスな
ところ^り皆^て論理的直説法を用い^るる印度でも
此風習を永く後^にい^るものと見^るる夫の瑜伽
論の如^くも無着の都率天のら每晚弥勒菩薩
と招待^して^了説法^{して}も^らる^ると^なり^言ふ^のも
皆此詩的趣向の遺風を有る
其れ^に有^るら^して^了佛教を研究するも此雄
大壯麗な叙事詩の中より其中に包含せら
れて居る所の哲学宗教の原理を見と^して^了而
して後人に向^て其れと後^のい^ふや^とする^も
を全^く此詩的趣向と排除して文明世界普通
の論理的経験的の之と澄^めて^了行^うる^も有^る
らぬの下有る
第五節 第二の図画的と言ふの印を^も五
明と言ふて^了五つの學問が有る